

主イエスが聖書に記されている伝道活動、すなわち教えや奇跡が行われ、天国を宣べ伝えられたのはガリラヤ地方が中心でありました。ガリラヤ湖畔の町カファルナウムに拠点を置かれた主イエスは、3年間にわたる伝道生涯の大半をこのガリラヤ地方で過ごされたのです。聖書の巻末にあります地図を見てくださいと、ガリラヤ地方には聖書に登場する馴染み深い地名がたくさんあります。伝道の本拠地カファルナウム、その隣町のベトサイダ、結婚式で主イエスが水をぶどう酒に変えて祝福された奇跡物語の舞台となったカナ、一人息子が亡くなり、悲しみの葬儀行列に主イエスが出会ったナインなどです。そして主イエスが30歳まで過ごされた町ナザレもまたガリラヤの町の一つです。

主イエスの30歳までの生涯は聖書にほとんど記されていません。福音書の記者たちが伝えようとしたのは、天国を宣べ伝えた主イエスの3年間の伝道生涯であったからです。福音記者たちは30歳までの主イエスの生涯を知らなかったわけではありませんが、それが福音書を記す目的ではなかったため、あえて触れなかったのです。

本日の福音書の箇所は、主イエスの30歳までの生涯を知る、数少ない手がかりの一つです。

最初に「この人は、大工ではないか」と主イエスが呼ばれています。そしてそのすぐ後に主イエスは「マリアの息子」と呼ばれています。主イエスのこの世の父はヨセフですので、ヨセフの息子と言われることはあってもマリアの息子と呼ばれることはありませんでした。そう呼ばれるのは、ヨセフがすでに亡くなっている場合ということになります。3年間にわたる主イエスの伝道生涯にヨセフは全く出てこないことから、この世の父ヨセフは主イエスが30歳になるまでに亡くなっていたということになります。そして父の仕事であった大工を継いでいたのです。

主イエスは当然のことながら家族の中では長男でした。そしてここに4人の弟の名前が記されており、また名前は記されておられません。姉妹たちがいたとかがかかれていますので、妹が少なくとも二人いたということになります。弟の中で最初に出てまいりますヤコブは、使徒言行録の記述によりますと、後にエルサレム教会の重要人物としてペトロと共に活躍することになります。聖書にはたくさんのヤコブが出てまいりますので、区別するため主イエスの弟のヤコブを、主の兄弟ヤコブと呼んでいます。

こうしたことから主イエスは30歳になるまで、亡くなったヨセフのあとをついで大工となり、母マリア、4人の弟、2人以上いた妹の大黒柱として家族を支えておられたのです。

故郷の町ナザレの人々が知っているのは、こうした姿の主イエスであったのです。

久しぶりに主イエスは故郷の町ナザレにやってきました。これまではマリアの息子としての存在でありましたが、今は天国を宣べ伝えるメシアとして主イエスはナザレに来られたのです。マルコによる福音書を読み続けてまいりますと、4章35節以来、主イエスは力ある業を行われ、人々に驚きと喜び、希望を与えてきたのでした。しかし故郷の町ナザレではそうはいきませんでした。

本日の福音書では、主イエスが「この人」と4回も呼ばれています。主イエスが大工であることも、マリアの子で、ヤコブ、ヨセの兄弟であることも事実でした。しかし、郷里の人々は、自分の知る限りの大工をして家族を支えていた「この人」にこだわり続け、「メシア」としての主イエスの姿に全く気付いていなかったのです。

主イエスはナザレで何一つ力あるわざを行われませんでした。もちろん主イエスはナザレにおいても不思議な業を行われる力はお持ちでおられたに違いありません。問題は、主の力ではなく、周りの不信仰にありました。主イエスは、いつでも（急ぐ道の途中でも）、どこでも（ユダヤ人たちが異邦の地と呼んでいた所でも）、どんな問題に対しても（死という問題に対しても）、力あるわざを行うことがお出来になりました。しかし、主イエス自身に何一つ期待しようとしないう、奇蹟も信じないような人々の中で、主イエス働きは人々の中で芽を出すことはなかったのです。主イエスは奇跡を行って人々を驚かせるのが目的ではなく、天国を宣べ伝えることが目的であったからです。主イエスは、郷里の人々の不信仰に対する驚きを表されました。この後福音書を読み進めていきますと、主を感嘆させた素晴らしい信仰が登場してきます。神から遠く離れているとユダヤ人たちがいつも言っていた異邦人の中に見られた信仰、あるいは貧しいやもめや罪人の信仰でした。ルカはこうした物語をこれから登場させながら、ナザレにおける人々の姿に主イエスがどれだけ落胆されたのか、悲しまれたのかを記しているのです。

このようにナザレの人々は主イエスの中にメシアの姿を見出すことは出来ませんでした。メシアはどこにいますのでしょうか。どこから私たちに働きかけておられるのでしょうか。その姿をしっかりと見出し、業と心を合わせて従い続けていきたいものであります。